

## りびんぐらいぶず 平成29(2017)年2月第2号

### 四聖諦(ししょうたい)(苦諦、集諦、滅諦、道諦)

#### はじめに

第五十三回龍谷教学会議の大会テーマは「科学技術の発展と人間」であります。何しろ大きなテーマですので、短期間に構想を練り上げるのも容易ではありません。このようなテーマについて大きな成果を期待するには、望むらくは、せめて一年前にでも公開して戴きたいところであります。

ともあれ、不肖は漸く「科学技術の発展と仏教者の使命」と題してこの程、申請致しました。

この間、昨今とりざたされているユヴァル・ノア・ハラリというイスラエル人歴史学者が顕した『サピエンス全史』を繙いておりました。決して仏教の専門家でもないと思われるのに、彼が記した仏教についての記述(邦訳)には驚かされます。

#### ゴータマ・シッタールタの発見

自然法則を信奉する古代宗教のうちで最も重要なのは仏教で、仏教は今なお、主要な宗教の一つであり続けている。

仏教の中心的存在は、神ではなく、ゴータマ・シッタールタという人間だ。

仏教の伝承によると、ゴータマは紀元前五〇〇年頃のヒマラヤの小王国釈迦族の王子だった。若い頃王子は自分の周りの至るところで見られる苦悩に深く心を悩ませた。

戦争や飢饉のみならず、老若男女は不安や落胆、欲求不満といったすべて人間の境遇とは切り離しようもないものにも苦しんでいるのを目にした。人々は富や権力を追い求め、知識や財産を獲得し、息子や娘をもうけ、家屋を建てる。それなのに何を成し遂げようと決して満足しない。貧しい暮らしを送る者は富を夢見る。巨万の富を有する者はその倍を欲しが。金持ちで高名な人さえ、満足していることは珍しい。彼等も耐えず不安や心配につきまといわね。果てに病や老、死によってそれに終止符を打つ。人が蓄え、積み上げたものはすべて煙のように消え失せる。人生は意味のない愚かな生存競争だ。

だが、どうすればそこから抜け出せるのか？

ゴータマは二十九歳のとき家族も財産も後に残して、夜中に王宮を抜け出した。住む場所もない放浪者として印度北部を歩き回り、苦悩から逃れる方法を探した。修行所を幾つも訪ね、聖者の教えを乞うたものの、完全には解脱できなかった。常に何かしら不安が残るのだった。だが彼は絶望しなかった。完全な解脱(げだつ)の方法を見つけるまで、苦悩について独自に吟味することを決心し、人間の苦悩の本質や原因、救済について六年に亘って苦行し瞑想した。

そして終に、苦悩は不運や社会的不正義、神の気まぐれによって生じるのではないことを

悟った。苦悩は本人の心の振る舞いの様式から生じるのだった。

心はたとえ何を経験しようとも、渴愛(かつあい)を以てそれに応じ、渴愛は常に不満をともなうというのがゴータマの悟りだった。心は不快なものを経験すると、その不快なものを取り除くことを渴愛する。快いものを経験すると、それが持続し、強まることを渴愛する。

したがって、心はいつも満足することを知らず、落ち着かない。痛みのような不快なものを経験したときには、これが非常に明白になる。痛みが続いている限り、私達は不満で、何としてもその痛みをなくそうとする。だが、快いものを経験したときにさえ、私達は決して満足しない。その快さが消えはしないかと恐れたり、或いは快さが増すことを望んだりする。

人々は愛する人を見つけることについて何年も夢見るが、見つけたときに満足することは稀だ。相手が離れて行きはしないかと不安になる人もいれば、大したことのない相手によしとしてしまったと感じ、もっとよい人を見つけられたのではないかと悔やむ人もいる。

偉大な神々は雨を降らせ、社会的機関は正義や医療を提供し、幸運な偶然で大金持ちになる人もいるが、そのどれも、私達の基本的な精神パターンを変えることはできない。そのため、どれほど偉い王であっても不安を抱え、絶えず悲しみや苦悩から逃げ回り、より大きな喜びを永遠に追い求めて生きる定めにある。

### 悪循環から脱する方法

ゴータマはこの悪循環から脱する方法があることを発見した。心が何か快いもの、或いは不快なものを経験したときに、物事をただあるがままに理解すれば、最早苦しみはなくなる。人は悲しみを経験しても、悲しみが去ることを渴愛しなければ、悲しさは感じ続けるものの、それによって苦しむことはない。実は、悲しみの中には豊かさもあり得る。

喜びを経験しても、その喜びが長続きして強まることを渴愛しなければ、心の平穩を失うことなく喜びを感じ続ける。

だが心に、渴愛することなく物事があるがままに受け容れさせるにはどうしたらいいのか？ どうすれば悲しみを悲しみとして、喜びを喜びとして、痛みを痛みとして受け容れられるのか？

ゴータマは、渴愛すること無く現実があるがままに受け容れられるように心を鍛錬する一連の瞑想術を開発した。この修行で心を鍛え、「私は何を経験していたいか？」ではなく「**私は今何を経験しているか？**」に専ら集中する。この様な心の状態を達成するのは難しいが、不可能ではない。

ゴータマはこの瞑想術の基礎を人々が実際の経験に集中し、渴愛や空想に陥るのを避け易くなるように意図された一揃いの倫理的規則“五戒”（註参照）に置いた。

彼は、弟子達に殺生や邪淫、窃盗を避けるように教えた。そうした行為は必ず権力や快樂や富への渴愛の火を掻き立てるからだ。

註:仏教の在家信者が守るべき「五戒」である。

一つは、**不殺生戒(ふせっしょうかい)**、生き物を殺さないこと。二つ目は、**不偷盜戒(ふちゅうとうかい)**、盗みをしてないこと。三つ目は、**不邪淫戒(ふじゃいんかい)**、よこしまな男女の交わりをしないこと。四つ目は、**不妄語戒(ふもうごかい)**、うそをいわないこと。五つ目は、**不飲酒戒(ふおんじゅかい)**、酒を飲まないことである。

こうして渴愛の火を完全に消してしまえば、それに代って完全な満足と平穩の状態が訪れる。それが「涅槃(ねはん)」として知られるものだ。この言葉の文字通りの意味は、「消火」だ。涅槃の境地に達した人々は、あらゆる苦しみからすっかり解放される。彼等は空想や迷いとは無縁で、この上ない明瞭さを以て現実を経験する。依然として不快さや痛みを経験することはほぼ確実だが、それによって苦悩に陥る事は無い。渴愛しない人は苦しみようがないのだ。

ゴータマ自身は涅槃の境地に達し、苦しみから完全に解放され「仏陀(悟りを開いた人)」と呼ばれるようになった。

仏陀は誰もが苦悩から解放されるように、自らの発見を人々に説くのに残りの人生を捧げた。彼は自分の教えをたった一つの法則に要約した。苦悩は渴愛から生まれるので、苦悩から解放される唯一の道は、渴愛から完全に解放されることで、渴愛から解放される唯一の道は、心を鍛えて現実をあるがままに経験することであるというのがその法則(ダルマ)だ。

「ダルマ」を仏教徒は普遍的な自然の法則と見なしている。苦悩は渴愛から生じるというこの法則は、常にどこでも正しい。仏教徒とは、この法則を信じ、それを自らの全活動の支えとしている人々だ。合掌。

(後書き)煩悩の身そのまま今生で涅槃に達しうるのははさておき、かくまでに具体的な仕方での四聖諦の解説に瞠目せざるを得ません。心はたとえ何を経験しようとも渴愛を以て是に応じるというのはその極みであります。合掌。

<p>正覚寺「親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」実行委員会 二月五日十九時より 本年 10 月迄のお聴聞の会(御法話会)は、実行委員会会合のためにお休み致します。 正覚寺仏教婦人会例会 二月十六日(木)一九時半より 著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥</p>
---